

自分史 (Y.F.)

作成日：令和3年8月

昭和 10 年 1 月	台湾にて長女として生まれる
昭和 16 年 4 月	日本人学校に入学
昭和 20 年 8 月	終戦
昭和 21 年 3 月	台湾より日本（静岡県磐田郡福田町小島）に引揚げ
昭和 21 年 4 月	福田町小学校へ転入学
昭和 22 年 1 月	父死亡
昭和 22 年 4 月	三ヶ町村新明中学校へ入学
昭和 25 年 4 月	磐田市立女子高等学校へ入学
昭和 29 年 4 月	浜松高等看護学院へ入学
昭和 32 年 4 月	国立浜松病院へ就職（4 年後退職）
昭和 36 年 4 月	名古屋保健婦学院へ入学
昭和 37 年 4 月	福田町役場へ就職（4 年後結婚で退職）
昭和 37 年	母死去
昭和 40 年	結婚
昭和 41 年 9 月	静岡済生会病院へ就職
昭和 42 年 2 月	第 1 子生まれる
昭和 43 年 3 月	静岡済生会病院退職
	以後、家事、子育て
平成元年 4 月	娘の会社が東京進出し、娘が上京
平成 5 年 10 月	夫が肝硬変のため死去
平成 8 年 4 月	上京し娘と同居開始
平成 10 年 4 月	大井町大村病院へ就職
平成 20 年 3 月	大井町大村病院を退職 退職後は家事の傍ら看護学院時代の同級生と年に 2 回ほど旅行
	現在に至る

私は昭和 10 年 1 月に父○、母○の長女として台湾の曾文郡六甲庄七甲というところで生まれた。長女と言っても 6 人兄弟の 4 番目で、上から長男滋○（大正 14 年生）、次男逸○（昭和 3 年生）、三男亮○（昭和 4 年生）、私、四男俊○（昭和 12 年生）、規○（昭和 18 年生）の男兄弟の紅一点だった。



※台湾にて母、兄弟たちと



※兄弟と台湾のご近所さん

当時の日本人は台湾のためにダムや道路、橋などの土木工事をしたり、駅舎などを作っ

たりしていた。会社名は覚えていないが、父も台湾でダムをつくる仕事をしていて、父が作っていたダムは八田さんという有名な方が工事に関わっていて、後に上京した時に八雲の台湾関係者の方のお宅でその八田さんの本を借りて読んだ覚えがある。母は台湾に来てからは専業主婦だったが、台湾に来る前までは看護師をしていた。私が看護師という職業を選んだのも母の影響が大きかった。

台湾には小学校5年生までいたが、日本人だけの国民学校に通った。私の家は日本人部落の中にあり、長屋2棟をみんなで分け合って住んでいた。近くに池があり、その池の向こうが小学校だったので、学校までは非常に近かった。小学校の全校生徒は50名ほどで私のクラスは6人だった。クラスに一人医者の子供がいてこの子は台湾人だった。台湾人でも医者の子は日本人の学校に来るんだなあと思っていた。

台湾での住まいは田舎にあった。兄はカギ（漢字は忘れた）という大きな街の中学校に通っていたが、私は台南やカギといった大きな街にはほとんど行かなかった。近所にお寺があり、木と木の間にブランコを作って遊んでいたのを覚えている。男兄弟の中で育ったからか、遊びの時も男の子の中に女の子2人が混じって男勝りな遊びをしていた。甘いサトウキビの茎をくちやくちやくと食べながら、運動場にあったテニスコートでテニスをしたり、弟とベーゴマをしたり、おはじきやケンケンパーをしたりして遊んだのを覚えている。また、祖父母が静岡にいたので、時々大きな船に乗って静岡に帰るのがとても楽しみだった。

終戦の時は台湾にいた。終戦を大人の人がどのように感じたのかは分からないが、私はまだ子供だったので負けた悲しさなどは分からなかった。長男の滋〇が予科練に志願して軍に入隊していたお陰で日本へは早く帰国することができた。台湾から日本へは小さい駆逐艦で帰ってきた。私と父は酔わなかったが他の家族を含め周りの人はみんなゲージと吐いていた。船では何も食料が無く、とてもおなかが空いたのを覚えている。2昼夜かかって鹿児島に着き、鹿児島港で地元の人が作って振舞ってくれたおにぎりがとても美味しく感動したのを覚えている。そのおにぎりは、今でも忘れられない本当においしいおにぎりだった。

鹿児島から静岡までは車で帰ってきたのだが、それがとても大変だった。3月だったのでまだ寒かったが、車には窓ガラスが無く、しかも蒸気機関車だったので黒い煙も社内に入ってきた。砂糖を持ってきていたので車の中でそれを舐めたりしながら過ごした。私は小学校5年生だったが下の弟はまだ3つくらいだった。それでも背中にはリュックを背負わされていた。別府、鳥取、宇治などで少しずつ人が降りていき、約2日かかってやっと静岡の磐田に着いた。磐田に着いてからは実家のある小島まで2里ほどの道のりを家族で歩いた。3歳の弟も一生懸命歩いていた。今思えば、小さい子供をたくさん連れて台湾から帰ってくるのは本当に大変だったと思う。祖父母の家にも馴染みがあったので日本に帰ってこれたことは安心したし、とても嬉しかった。

帰国してからは、地元の福田小学校に入学した。台湾は標準語だったので私の話し言葉に訛りは無かったがクラスメイトには方言があったので少し戸惑った。しかし、先生が「浅

井さんの本の読み方はとても綺麗ですね」とクラスのみんなの前で言ってくれてとても嬉しく、またそれがきっかけでクラスのみんなが私の近くに集まってくれ、学校には直ぐに馴染めた。

終戦の翌年に父親が亡くなった。病名は分からないが胃潰瘍かもしれないと大人の人には言っていた。終戦からの帰国で疲れていたのもあると思う。せっかくあんなに苦労して帰ってきたのに死んでしまうなんて、と思うと本当に悲しかった。家計的にも非常に厳しくなっていて母は大変だったと思うが、上の兄達が働いてくれて家計を助けてくれた。兄達は私の高校までの学費を出してくれた。とても感謝している。

中学校は三ヶ町村神明中学校に、高校は磐田市立北高等学校という女子高に入学した。高校では学級委員をし、スポーツでは卓球やバレーボールをした。私はあまり上手くなかったので、今テレビで卓球やバレーボールを見るとみんなスーッとボールがコートに入って凄いなあ、と思う。私は全然ボールが思った方向に飛ばなかった。

高校を卒業してからは浜松高等看護学院へ入学した。母親が看護師をしていたというのも大きかったが、私も「人を助ける仕事をしたい」と思っていた。それに国費だったので、無料で学校に通えることも大きかった。学費が無料の上に、この学校では毎月800円の金銭支給があった。このお金でおやつが買えるのがとても嬉しかった。家ではおやつなんて買える状況ではなかったのに。



※看護学校

国費で通わせてもらった学校だったので、卒業して4年間は決められた職場で働かなくてはならなかった。国立浜松病院に就職した。4年務めた頃に町役場で助役をしていた叔父(父の弟)に「町役場で保健婦が必要なので保健婦になってくれないか」とお願いされ、名古屋保健婦学院へ入学した。これも町費だったので学費は不要だったが卒業後は町役場で4年間働くことが条件だった。毎日50ccのバイクに乗って町中の人々の血圧を測って回ったのを覚えている。

ちょうどその頃、母が亡くなった。持病の高血圧が悪くなったとのことだった。母とはいつも一緒にいたのでとても悲しかった。

その後、静岡済生会病院へ就職したが、ここでは外来、内科、外科、小児科などほぼ全ての業務をこなした。自衛隊が近くにあり、結核になった自衛隊の人が入る結核病棟でも勤務した。私は予防接種をしていたので感染は怖くなかった。

夫とは福田町役場で働いているときに知り合った。お仕事で付き合いのあった静岡県庁の人が紹介してくれたのだ。夫は私より10歳年上の静岡県庁の職員だった。夫との新婚旅行はとても楽しかった。広島まで車で行った。確か3泊4日くらいの短い旅行だった。広島市内の観光や宮島などに行ったが、真珠の指輪やネックレスを買ってくれたのがとても嬉しかった。2人で宝石店を見て回り、「あれにしようか、こっちにしようか」と色々迷いながら買ったのも初めての経験で楽しかった。その真珠の宝石は今でも持っていて、私が死んだときには棺桶に入れてほしいと思っている。



※結婚式に兄弟たちと

結婚してからは静岡済生会病院の医療社会事業部で勤めたが、その頃に子供が生まれた。今のように子供を預けられるところは少なかった。子供を連れて職場に通っていた。病院にはリネン室という女性がたくさんいるところがあったので、そこで面倒を見てもらっていた。しかし、やはり子育てと仕事を両立することは大変で2年経った頃に退職した。

子供は、絵〇（昭和 42 年生）、晋〇（昭和 43 年生）、敬〇（昭和 44 年生）、角〇（昭和 47 年生）、康〇（昭和 51 年生）と年子が続いたので、子育てはとても大変だった。しかし、夫は子供好きだったので子供を車に乗せて色んなところに連れて行ってくれたり、近所の公園に連れて行ってくれたり、子育てを手伝ってくれて助かった。県庁は残業も少なく、休みもきちんと取れたので夫も子育てを楽しんでいたのだと思う。今思い返すと子育てをしていたあの頃が一番大変だったけど、一番楽しかったと思う。

子供たちは全員東京の大学に行った。子供が親元を離れるのは寂しいと言えば寂しかったが、一度に全員がいなくなるわけではないので、そこまでの寂しさは無かった。かえって夫婦 2 人になって良かった面もあったと思う。一番下の子が大学に入ったあたりに夫は亡くなった。おそらくホッとしたのだと思う。肝硬変ということだった。夫も子供もいて大勢で暮らしていたのに急に 1 人ぼっちになったように思って寂しさを感じるようになった。一人で静岡にいるのが嫌になり、その頃まだ未婚で静岡の食品会社の東京支店で働いていた娘のところに強引に引っ越した。

上京してからは看護学校の頃の同級生達 5-6 人と一緒に年に 2 回くらい国内旅行を楽しんだ。北は北海道から南は九州まで色んなところに行った。今までカメラなんか触ったこともなかったけど、家にカメラがあったので私が撮って、その写真をみんなに配ったりするのも楽しかった。娘と相撲を見に行ったり、楽しい思い出はたくさんある。



※霧島と共に

私の最後の職場は東京大井町の大井町病院だった。初めは「付添い職」という職種で入ったのだが、看護師の資格を持っていたので看護師にならないかと言われ、看護師として勤務した。やはり看護師の仕事は楽しかった。患者の方や同僚と話すもの楽しかったし、私は元々人に憎まれるような性質ではないので、みんなにもよくしてもらった。看護師は人の助けにもなるし、良い職を選んで良かったと思いながら働いていた。しかし、70歳になった時、疲れも出るし耳も遠くなってきたので退職することにした。



※大井町病院にて

今はデイサービスに通っている。そこでは友達と話したりできるので楽しい。麻雀は台湾で兄から習ったのだが、習っていて良かった。そのお陰でデイサービスでも麻雀をして楽しめている。台湾時代は高くて牌が買えず、2番目の兄が竹で作った牌で兄と麻雀をしたのを思い出す。

こうやって自分史作成のために人生を振り返ると、今までは仕事と子育てに夢中だったように思う。今まで私の人生でどんなことがあったのかを思い出しながら自分史を作ったのはとても楽しかった。



※自宅マンション前にて

<若い人たちへのメッセージ>

・良い友達を作ること。今の日本は少子化が進んでいて子供が少ない。友達を作ると相談もできるし、色々な話も聞ける。人生が楽しくなる。

・子供を甘やかしてはいけない

・本をたくさん読むこと。本の中には社会のことや作家の考え方などたくさんの情報が入っている。自分一人では経験できないことを本から知る事が出来る。

・自分の好きな職業技術を身に付けること。自分の好きなこと、やりたいことを仕事にするのが良いと思う。私は母が看護師だったので看護師になったが、患者さんが良くなって退院するときなどは本当に嬉しかった。やりがいのあるいい仕事だと思った。